

「学生の成長」を見据えて考える自校教育科目の新たな役割

シラバスに記載された到達目標の経年検証とあわせながら

○大川 一毅（岩手大学） 大野 賢一（鳥取大学） 鳶田 敏行（茨城大学）

1. はじめに

学生の「大学帰属意識」の強さや「教員・学友との関係」の深まりが、大学における主体的学びに影響することが明らかとなってきた。こうしたことをふまえ、あらためて自校教育に着眼する。自校教育を広く定義するならば『自校（自学）に関わる特性や現状・課題等を中心的な教育内容、教育題材として実施する授業科目、もしくは特定期間実施される一連の教育活動』と定義できる。これまで自校教育は、カリキュラム自由化への対応、大学目的の周知、不本意入学者への対策など、ともすれば「大学の都合」で導入実施されてきた。しかし本報告では、自校教育科目（授業）を大学における「学生の成長」を促進する教育・学修機会として捉え、その現状や今後の可能性について、シラバスに記載された到達目標を検証しながら考えていきたい。

2. 本報告における問題の所在と研究目的

1) 学位授与方針とそれを知らない学生

2016（平成28）年の中教審答申は、大学機関別認証評価の重要事項として「3ポリシー」の実質化と「教育の内部質保証」を提示した。これにより3巡目の大学機関別認証評価では、それぞれ大学は学位授与方針に掲げた能力や資質について、学生がこれを修得しているかを可視的な指標に基づいて検証し、その結果を「教育・学習の成果」として実証（「質保証」）することを要請している。

学習成果とは大学教育を通じた「学生の成長」ともいえる。学生の成長について、溝上は「大学教育の目的・目標に準拠した学習活動を行い、学生をある姿にそだてあげることであるとまとめられる。学士力の要素として示されている知識・理解や汎用的技能、態度、指向性なども、大学や学部・研究科で示されるDPをもとにした学習目標も、すべては学生の学びを通しての「成長」指標といえるものである」と定義する*。すなわち、今日において大学は、学位授与方針に沿って学生の成長を促すための教育的働きかけを行い、その成果を実証することで「教育の質」を保証することが必須とされる。しかし、実際には学生の多くが学位授与方針や養成しようとする人材像を認知しておらず、大学の理念や目標にも関心を持っていないのが現状であろう。確かに学位授与方針は、各大学のホームページをはじめ、新入生に配布される「履修要綱」や「学習の手引き」に掲載され、入学時ガイダンスや初年次導入教育でも言及されている。しかし、これで学生は学位授与方針を認識するのか。大半の学生は、大学の理念や教育目標、学位授与の方針を知らぬままに大学へ身を預け、自らの成長を託しているのではないか。

2) 「学生の成長」と自校教育

こうした中で自校教育に着目する。2000年代以降、大学設置基準の緩和に伴う教育課程の自由化や国立大学の法人化、大学のユニバーサル化にともなう不本意入学者の増加、あるいは周年事業で進めた学園史の編纂など、それぞれを背景にして自校教育科目を導入・実施する大学が増加した。学生の大学適応を意図して初年次ガイダンス科目に組み込まれる場合もある。これらのことから自校教育は、ともすれば「大学の都合」で導入され、普及してきたといえる。しかしそうではなく、「学生の成長」を見据え、これを促進する教育・学修機会としての役割を自校教育に期待できまいか。自校教育の授業で、それぞれ大学の建学精神や沿革、研究や教育の特性、文化や校風、立地背景などを伝え、これらをふまえて学位授与方針に示される達成目標や養成しようとする人材像の意義を学生に理解してもらう。学生はこの授業での学修経験によって、自らの大学を知り、自学で実現可能となる学びや大学生活、社会貢献活動を把握するなど、大学の教育目標を自身の学修・

行動目標に置き換えて実質化しながら、将来像を主体的に構築していく。本報告はこうした可能性を期待して、自校教育と「学生の成長」の関係性に着目し、シラバスにおける到達目標の検証をふまえながら、「学生の成長」を促進する自校教育の新たな役割を考察する出発点としたい。

3. 報告にあたっての研究方法（自校教育科目の「到達目標」検証）

本報告にあたり、2008年に実施した「自校教育授業に関するアンケート調査」で把握した自校教育科目のうち「フルバック型授業」（全授業回数を自学に関する内容で構成した科目）を対象に、授業の実施状況や到達目標、及びそれらの経年変化を明らかにするため以下の分析を行った。

- 1) アンケート結果で把握した「フルバック型授業」について、2008年度データの再確認、及び2017年度における実施状況（継続、廃止等）をシラバスにより調査・把握した。
- 2) フルバック授業が継続されている場合、2017年度のシラバスに記載された「到達目標」「授業目的」「キーワード」「学位授与の方針等との関係」等の文書データを収集した。また、同大学において新たな自校教育科目（フルバック型授業に限る）が開講されていた場合は、新規データとして追加した。
- 3) 継続実施されている自校教育科目について、「到達目標」「授業目的」「キーワード（シラバス設定欄）」（2017年度のみ）を対象にテキストマイニングを行い、抽出した自校教育に関連するキーワード（語句）の重要度（出現頻度等）によって全体の状況を把握し、あわせて国立大学と私立大学、2008年度と2017年度、等の相違を比較、検証した。

4. 検証の結果

自校教育科目（フルバック）について、2008年度実施授業として73科目（国立大学26科目、私立大学47科目）を確認している。これらの2017年度状況は、開講継続51科目（国立大学17科目、私立大学34科目）、閉講（廃止）20科目（国立大学9科目、私立大学11科目）、不明2科目だった。

開講継続されている自校教育科目シラバスの到達目標の記載から抽出したキーワード（頻出重要語句）として、2008年度、及び2017年度共通に現出するのは「大学」「歴史」「理解」「教育」といった語句である。これら共通するキーワードから、まずは自校教育科目における基本的視座が見てとれる。国立大学に固有のキーワードについては「研究」「課題」という語句を抽出でき、私立大学では「理念」「建学」「精神」「キリスト教」といった語句があがった。到達目標において2008年度シラバスと2017年度シラバス記載内容を比較するならば、新出傾向のキーワードとして、国立大学では「高等教育」「知識」、私立大学では「活動」「自己」「学習」「活躍」「意義」「生活」「校友」「アイデンティティー」という語句を抽出することができた。

2008年度及び2017年度双方の全自校教育科目シラバスに掲載された到達目標にあって、キーワードを「学生の成長」という視点から選出するならば、「歴史」「意欲」「誇り」「自ら」「自覚」「未来」「将来」「アイデンティティー」「指針」「愛着」「主体」などの語句があがった。

到達目標に使用される語句について、国私立別に見るならば、国立大学では「学生の成長」促進に関わるキーワードが多いことを確認した。また、私立大学の2008年度と2017年度シラバス到達目標キーワードを比較すると「歴史」「あゆみ」「日本」などの語句が減少する一方、「目標」「自己」「学習」「役割」「自分」「活躍」「知識」「形成」「研究」「生活」「政治」「アイデンティティー」等、語句が多様化し、それらのいくつかは「学生の成長」と関わるものだった。

5. おわりに（知見と課題）

自校教育科目に関する2008年度と2017年度のシラバスを経年的に検証するならば、到達目標記載欄の設定が進んでいた。また、到達目標の経年検証からは「学生の成長」促進に関わるキーワードが多くなっていることも確認できた。このことから、すでに自校教育科目は「学生の成長」促進機能を担っており、今後さらにそれを強化するならば「大学の学位授与方針」と「学生の学び」を「橋渡し（仲介・実質化促進）」する教育内容、方法、評価の具体的検討が課題となろう。